

「鎌倉の遺跡と発掘成果Ⅱを受講して」
講師 押木弘己氏

3386 関塚 通 会員

今回の研修は、(1)鎌倉における遺跡(「面」)形成のおさらい と (2)中世の鎌倉で数多く建てられた「竪穴建物」の2点についてでした。

押木講師は、上記テーマの導入部分で最初に鎌倉という地域が平らな土地が少なく袋のような狭い土地から始まったことに言及され、山を削って、砂丘の高まりを平面化して土地を確保してきた鎌倉の歴史に触れる中で、発掘から見えてきた事として、以下をあげられました。

- ・頼朝に始まる源氏3代の時代は鶴岡八幡宮、大倉幕府(御所)、永福寺にわたる地域での土地利用が中心であった。
この領域周辺は現在個人住宅が多く、大蔵幕府(御所)の拡がり把握しにくい状況になっている。

源氏3代の始まりからほぼ50年後に北条政子が亡くなり、3代執権北条泰時が幕府(御所)を移行。

- ・二ノ鳥居近隣の宇都宮辻子(うつのみやずし)幕府(御所)を設定、12年後には若宮大路幕府(御所)に移転した。政治の中枢が大倉エリアから若宮大路沿いに移ったことで都市域も南に広がり、人口増加にともない土地利用の密度も高まっていったことが、質・量ともに豊富な発掘資料からうかがえる。

以上の導入部は、日頃の発掘作業で限られた土地の中で面と点に注目している私にとっては鎌倉全体を敷衍した中での地域特性が見えて来て、現在及び今後発掘を行う地域についての見極め(大枠)がし易くなるという事で興味深い内容で大変参考になりました。

次にテーマに従い(1)鎌倉における遺跡(「面」)形成のおさらいの説明に移行しました。

- ・「面」の形成では、
地山の上に何面も積上げられた過去の累積を図解で示され、発掘はその逆を掘り返していくため、一つ一つの面を逆に大切に掘り返して行かないと過去の時代、面の様子が全く不明となるため、1面毎の発掘の慎重さが要求されることを再認識させられました。
とはいえ、実践で体に浸み込ませないとダメだなといった実感を持ちました。
また「きりあいの状況確認(新旧の確認)」、層位論と形式学をベースとしたかわらけの形分析、紋様の見比べ、層位の判断等々、なかなか難しく、これも今回の講義を念頭に実践の中で調査員の方から教えて頂く事で体験して行きたいとの感想を持ちました。

- ・「面」調査方法では

- ① 水抜き溝(カマ場)や攪乱などの壁をきれいに削って観察
 - ② 整地面上の「間層」をとらえる については、○1カ所集中にならない○周りとのバランスを合わせつつ柔らかいところの見極めをする○整地面を見極める努力をする等々実戦での体に浸み込ませる事をする。
 - ③ 一ヶ所に集中しない
 - ④ 削る方向を一定に保つ
 - ⑤ 「面出し」が終わったところには足を踏み入れない
 - ⑥ 調査員に確認する 等々についてはご指摘の通り、日頃の心掛けとして続けていく。
- 以上面の見極めではまだまだ未熟な自分にとって実戦での課題として取り込んでいこうという思いを持ちました。

- (2)「竪穴建物」について

- ・中世鎌倉の建物

- ① 礎石建物 と② 掘立柱建物 については、私の発掘経験2年の中でも①は無量寺跡で②は、北条小町邸跡(泰時・時頼邸跡)で経験済でした。
- ③板壁建物については、はっきりとはしていないが板壁を経験しており、それが該当するのかな

という思いで聴講しました。

・竪穴建物（方形竪穴建築跡＝「ホウタテ」）

発掘経験2年の私には未だ経験のない建物であり、今回の研修を通じて初めて知った構造物であり、興味深く聴講しました。

今後の発掘実践の中で是非経験してみたいと思いました。

最後に、日頃の実践では限られた土地の中での部分部分の点の見極め、選別になっていますが、こうした研修を通じて鎌倉地域全体と発掘との関わりを講義して頂いたことは、とても参考になり、またこうした機会でなければ得られない情報として、大変に有難く拝聴しました。

2019年11月 9日

関塚 通